

語ること _ 聞くこと _ そして伝えていくこと

小森はるかとは瀬尾夏美は、東日本大震災以後、2012 年からの陸前高田を拠点に活動し、2015 年に一般社団法人 NOOK（のおく）を設立し、仙台に拠点を移した。NOOK とは、土地と協働しながら記録をつくる組織であり、風景と人びとのことばの記録を軸に制作と発表を続けながら、対話の場の企画と運営も行っている。

震災後の風景を記録し、まちの人々にインタビューを行う中で、聞きたいことを一方的に得ようとするのではなく、語り手の伝えたいことを受け止めることも含めて、どうしたら両者が納得できるのかについて考え、行き着いたのが「協働」であった。まちの人びとに話を聞き、瀬尾が文章にする。それを語った当人に語り直してもらい、小森がその様子を撮る。瀬尾の書いた物語『二重のまち』は、震災から 20 年後の 2031 年に、かつてのまちや亡くなった人びとを思いながら、嵩上げで出来た新しいまちで暮らす人々を描いた、春夏秋冬の 4 章から成る物語である。《声の辿り／二重のまち》では、その物語をまちの人びとに手渡し、そこから想起されるエピソードを語りながら、関連する場所でそれぞれに朗読してもらった。

映画『二重のまち／交代地のうたを編む』では、4 名の旅人を復興工事の進んだ 2018 年の陸前高田に招き、まちの人々に話を聞いたうえで、土地の記憶を旅人それぞれが自らの言葉で語り直

すことを試み、2 人はそれを現代の「民話」と位置づけている。新たな視点の語りを被災地に召喚することで、これまでとは異なる、広がりを持つ記憶を未来へと語り継ぐことを目指している。



書籍『二重のまち／交代地のうた』



映画『二重のまち／交代地のうたを編む』制作風景

これまでに二人は、様々なメディアを活用しながら記録活動を続けてきた。それは目の前にある事象をただ形に留めることなく、時に時間をかけて事象と向き合い、自身で咀嚼したものを表現へと昇華させる行為である。

二人はこれからも、渡り鳥のような眼差しで風景をとらえ、旅人のような心持ちで話を聞き、表現者として伝えていくのであう。そして二人の作品が、ずっと語り継いでいく。